

[巻頭言]

憶測の対極としての科学



文部科学省 初等中等教育局 教科調査官

し ぶ や か ず の り
洪 谷 一 典

大綱的な基準である学習指導要領を説明するために発行されている学習指導要領解説の第1章総説の冒頭は、各教科等に共通して以下のような書き出しから始まっている。「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。」

しかし、解説の冒頭に象徴される近未来としての予測は、新型コロナウイルス感染症という喫緊の課題として、前倒しで訪れてしまった。地球規模の感染症に対して、身の回りには不確かな情報とともに根拠に乏しい憶測が氾濫し、その結果、例えば買い占めや高額転売、差別や偏見などの社会問題が生じたことは、記憶に新しい。明確な根拠に基づかぬ行動や考え方は、社会の分断を招きかねないという事実を皆が実感している。

科学は、こうした憶測の対極に位置付くと考えられる。例えば、刻々と変化する日々の問題状況に粘り強く向き合い、そこから課題を設定して、関係機関等と互いに協働してその解決を目指すことは、科学的な方法と言えるだろう。また、あふれる情報の中から真贋を見極めて得た信頼性のある情報を、問題状況の本質に照らして再構成し、解決に役立てようとすることは、科学的な考え方として腑に落ちる。このような方法や考え方は、多様に変化する状況下にあっても、目的を見失うことなく望ましい社会の実現に向けて問題解決を継続していくための本質だと思う。

先に取り上げた学習指導要領解説の総説は、次のように続く。「このような時代にあつて、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。」

決まった解を見い出すことが困難な時代はこれからも続く。問題の解決に向けて互いが有する知恵や強みを生かし、協働して納得解や最適解を見出そうとする「憶測の対極としての科学」を学校教育に期待している。